

〔研究ノート〕

バリ・プロテスタント・キリスト教会の 社会事業と学生による支援活動

林 陸 雄

目次

はじめに

1. 本学の学生を対象とした国際交流プログラム
2. バリ島におけるキリスト教の広がり
3. バリ教会の社会事業
4. ウィディア・アシ運営の財源問題
5. 植林プロジェクトへの取り組み
6. 国際ワークキャンプ・インドネシアの概要
7. 参加学生による自主的な支援プログラム
8. ソカの植林プログラム参加体験

さいごに

- 資料1 バリ・キリスト教・プロテスタント教会成立過程
- 資料2 バリ・プロテスタント・キリスト教会の構想と使命, 機構図
- 資料3 ウィディア・アシ本部発行の紹介パンフレット
- 資料4 CDCとは何か?
- 資料5 ウィディア・アシ本部作成「ソカの植林プログラム企画書」

キーワード：キリスト教, 社会事業, 児童福祉, 学生の自主活動, ボランティア

はじめに

本学はバリ・プロテスタント・キリスト教会 (Gereja Kristen Protestan di Bali, GKPB, 以下、バリ教会と略す) と協働して、1987年に国際ワークキャンプを開始し、来年には25回目を迎えることになった。その間に、バリ教会の事業を支援するために参加学生による自主プログラムが次々と登場してきた。

本論ではバリ教会の沿革と社会事業の概要とともに、最近の学生による支援活動について紹介したい。

本学の共同研究プロジェクト「インドネシアとの文化的交流を深めるための総合的研究(2)」は、その研究目的として「本学教職員と学生のインドネシアとの文化的交流をより深化させるために必要となる基礎的な研究」、「文化的交流をさらに深化させるための実践的な試み」を掲げている。その目的を具体化する方法として、「学部学生の研究会への参加」と「インドネシアとの交流活動への参加」を導入している。この学部学生による研究会への参加は、これまでにはみられなかった方式である。さらに、交流活動への参加を奨励し、その活動結果を整理報告させることを通じて、正課外の教育活動としても新たなアプローチを試みている。学生たちの国際感覚の醸成、世界の市民としての意識形成、国際的な活動力の高揚を如何にして達成させるのか、そのカリキュラムと方法は常に問われてきた命題でもある。

1. 本学の学生を対象とした国際交流プログラム

本学の学生を対象とした国際交流プログラムをみると、国際センター企画によるものの他、キリスト教センター企画、社会福祉学科企画、教職員による共同研究プロジェクト企画がある。

まず、国際センターでは22カ国50大学と交流協定を交わし、学生交換プロ

グラムを提供している。それには、大きく分けて長期派遣留学プログラムと短期海外研修プログラムの二つがある。前者には、英語による留学、英語以外の言語による留学、日本語実習の3種類がある。まず英語留学は14カ国30大学における6ヶ月または1年間の語学留学がある。英語以外の言語による留学は10カ国24大学においてなされている。日本語実習については6カ国6大学においてなされている。後者の短期海外研修には、英語のための短期海外研修が5カ国5大学においてなされている。英語以外の言語のための海外研修としては、イタリア語2大学、フランス語1大学、ドイツ語1大学、スペイン語1大学、ロシア語1大学、韓国語2大学、中国語3大学がある。日本語実習には3カ国3大学がある。これらは全て語学研修のみならず、異文化理解・異文化交流に重点を置いている。その他にボランティア活動やフィールドワークとして、地域支援（インドネシアCOP）、環境保全（内モンゴル緑化ボランティア体験セミナー、ヨーロッパ・エコスタディ）、社会支援（ベトナム異文化&ボランティア体験、オーストラリア共生社会体験セミナー）、現地調査（エンタテイメント・マーケティング）、職業体験（中国フィールドワーク、中国インターンシップ）をテーマとしたものが、8カ国9プログラムある。以上のようなプログラムを通じて、学生は国際感覚を磨き世界の市民としての素養を身につけていく。詳しくは本学ホームページ¹⁾を参照されたい。

次に、キリスト教センター企画として、国際ワークキャンプ・インドネシアがある。これは、本学の創立25周年記念事業として企画され、25年にわたって実施されてきた国際ボランティア活動プログラムである²⁾。第1回から

1) <http://www.andrew.ac.jp/i-center/index.html> (2011年1月6日確認)

2) その詳細については、桃山学院大学インドネシア・ワークキャンプ実行委員会編『アジアの人々の協働から学ぶ』、聖公会出版、1997年。『桃山学院大学キリスト教論集 第43号 国際ワークキャンプ20周年記念号』、桃山学院大学国際キリスト教センター『アジアの人々の協働から学ぶ 第1号～第24号』を参照されたい。

第4回までは春期休暇中に、第5回以降は夏期休暇中に実施してきた。参加学生は毎回20名前後であるが、通算すると500名以上の学生が参加したことになる。彼らの中から、海外への留学生、海外での日本語教員、海外在留のNGO職員、海外企業の社員、海外在留のカメラマン等が輩出している。多彩な進路選択だが、彼らは国際ワークキャンプ・インドネシアへの参加を契機として、海外への進出を選択している。

次に、この国際ワークキャンプの実施を本学と協働しているバリ教会について、その概要を紹介する。

2. バリ島におけるキリスト教の広がり

イスラム教徒が9割近くを占めるインドネシアにあつて、バリ島はバリ・ヒンドゥー教の島として知られる。そのバリ島において、オランダによる植民地政策のもと、キリスト教はどのようにして浸透していったのか。その歴史を概観してみる。

「オランダ支配の時代には、当局はバリ島から宣教師を締め出すのに専心し、バリ・ヒンドゥー文化にはできるだけ手をつけなくてもそのままにしておこうと試みていた」³⁾。しかし、1867年オランダ改革派教会の宣教師ヤコブ・デ・ヴロームとヴァン・エックがオランダ政府の意図を無視して急激に宣教を開始した。14年を超える活動で改宗したのはただ一人グスティ・ワヤン・カランガスンのみであった。1875年ヴァン・エックは病気のため島を離れた。1881年デ・ヴロームは事件に巻き込まれ殺害された⁴⁾。オランダは宣教師をバリ島に入れないという決意を新たにした。その後の70年間は、この方針をうまく貫き通した⁵⁾。

3) ダグラス・マッケンジー著、インドネシア・ワークキャンプ実行委員会訳『マンゴー樹の教会』、聖公会出版、41頁。

4) 同上、42頁。

5) 同上、43頁。

ところが、「1929年キリスト教宣教同盟の中国人代表ツァン・ト・ハン牧師が登場してきた」。「ジャワ島のオランダ政府総督は、ツァン・ト・ハン牧師がバリ島に赴き、バリ人女性と結婚していた多くの中国人キリスト教徒の面倒をみることを特別に許した」⁶⁾。バリのキリスト教は「1929年という初期の時代から中国人宣教師ツァン師と共にその歴史を刻み始め」⁷⁾、1933年には改宗者が266人に達している。宣教師ツァンは、条件に反して布教活動をしたので、ついには離島させられることになった。指導すべき牧師不在のもと、信徒達はヒンドゥー教徒から様々な迫害を受けた。そこで1935年にジャワのオランダ改革派教会から牧師と宣教師が派遣された。当時、信徒達は三つのグループに分かれていたが、新たに派遣されてきた牧師達のもとで一つに統合されるとともに、次第に信徒数が増加していった。信徒数が増えるにつれ、キリスト教とヒンドゥー教の対立が拡大していった。それに頭を痛めたオランダ当局は、人口の希薄な西部のジャングルを払い下げ、キリスト教徒を移住させた。1939年、29世帯の男子が入植し村を開拓しプリンピンサリ村と命名した。カトリック教徒も同じく入植しパラサリ村と命名した。1942年には、信徒数は2000人に達し、バリ人の牧師が初めて誕生している。1945年、3年間に亘る日本軍による植民地支配後、インドネシアは独立を宣言した。信徒達はそれまで所属していたオランダ改革派教会から独立し、1947年にプリンピンサリにおいて第1回プロテスタント・キリスト教会会議を開催した⁸⁾。1955年には、教会の教育伝道を目的として幼稚園1、小学校1、中学校3、高等学校1を設立し、ウィディア・プラ (widhya pura, 知の館の意) と名づけた。そして、ヒンドゥー教徒、イスラム教徒にも広く門戸を開いた⁹⁾。その小学校は、プリンピンサリ村の中心部である十字路の北東角に、北西角に位置する教会と向かいあって建てられている。教会会議で

6) 同上、43頁

7) 同上、64頁。

8) 同上、65頁。

9) 同上、65頁。

は、ウィディア・プラに二つの目的をもたせた。第一の目標は、「ヒンドゥー教、キリスト教を問わず、バリの若者を導いて、島の経済活動を担わせる」¹⁰⁾。第二の目標は「未来の指導者を育てる」¹¹⁾とした。

1961年に信徒数は3000人に達し、イ・ワヤン・マストラが小学校教師から転じて牧師に就任した。

1963年に、ヒンドゥー教の聖なる山アグンが噴火し、多くの被災者をもたらした。マストラは被災者の救済に奔走し、多くの人から信頼を得た。その結果、バリ北東部に小さな教会を5つ開設し、350人に洗礼を授けるに至っている。しかし、「マストラは1960年代のバリに特徴的な政治状況の中において、悲惨な事態に巻き込まれていくことになる。スカルノの支持者たち(その多くはジャワ人)は、富と権力を得ようと互いにしのぎをけずりながら、バリ島を支配していた。贈賄と道徳的頹廃がはびこっていた」¹²⁾。「そんな世のなかで、共産主義者のグループが権力を求めて行動を起こした……1965年9月30日、ジャカルタでクーデター勃発。……暴力による報復が始まった。……総力を挙げて共産主義を撲滅しようという大虐殺が行われた」¹³⁾。アグン山噴火の被災者救済に奔走するマストラは共産主義者だと疑われ、軍から殺害の危険にさらされていた。マストラは、支援するアメリカ人の勧めでアメリカに亡命し、デビュータ神学校に学び博士号を取得した(1971年)。その間にスハルト体制が整い、国内状況も安定したので、1972年にマストラは帰国しバリ教会の主教に就任した。3月21日～24日にアビアンバセで開かれた教会会議において、マストラ議長のもとで「バリの人々の、バリの人々のためのキリスト教会であることを示すべきである、との合意に達した」¹⁴⁾。そしていくつかの重要事項を決定した。その中に青少年教育事業の推進も唱

10) 同上, 70頁。

11) 同上, 70頁。

12) 同上, 61頁。

13) 同上, 61頁。

14) 同上, 66頁。

われている。

1974年に、マストラは西南ドイツNGOであるキンデルノトヒルフェ (Kindernothilfe, 困窮児童への支援の意, KNH)¹⁵⁾ と出会っている。カラニアスム県の山間部に生まれ育ったマストラは、早朝に起き小学校まで片道22kmを毎日通学した。卒業後進学したものの、中学校が村から42kmも離れていたため親戚の家から通い、食費と部屋代は自ら働いて支払った¹⁶⁾。教員養成校でも学寮に住み、親元から離れた生活の寂しさ以上に自由さと自己鍛錬の機会を得るとともに、青少年期における学寮生活の教育的意義を体験した。このような自らの体験を踏まえ、マストラは貧困家庭児童の救済と教育を保障するために、キンデルノトヒルフェの全面的支援を得てアスラマ (学寮) の開設に踏み出した。ウィディア・アシ (Widhya Asih, 知と愛の意) と名づけ、1975年に第1をデンパサールのセセタンに、1976年に第2をプリンビンサリに、1980年に第3をシンガラジャに、1981年に第4をウンタル・ウンタルに開設した。そして、1987年から本学と協働して、ムラヤ村にある第3中学校に併設して第5ウィディア・アシの開設に着手した。まず、館長の宿舎を建て、以後、1年に1棟ずつ子ども用の宿舎や食堂を建設していった。その働きが国際ワークキャンプ・インドネシアである。ワークキャンプのその後の活動については、6節で述べる。

3. バリ教会の社会事業

バリ教会は教育・社会省という事業部門を設けている¹⁷⁾。その責任者に牧

15) ドイツのNGO機関。アジア・アフリカ・ラテンアメリカを中心に28カ国を支援している。その活動の詳細については、www.kindernothilfe.com (2011年1月6日確認) を参照されたい。

16) Dr. I Wayan Mastra, "In the Face of Asian Realities, What has been the Church's response?", 『桃山学院大学キリスト教論集 第29号』, 45~46頁。

17) 資料2を参照されたい。

師を配置し、そこに教育部と福祉部を設置している。教育部は財団法人ハラパン¹⁸⁾(Harapan, 希望の意。開設初期にはウィディア・プラと称していたが、2000年の新体制の下でハラパンと改称)として政府から正式に認可されている。現在、保育園1、幼稚園2、小学校2、中学校3、普通科高校1、職業高校1を有している。他方、福祉部も政府から財団法人ウィディア・アシとして正規の認可を受けている。現在ではブレレンの第6、カランアスムの第7を加えて7カ所の児童養護施設を運営し470人の子どもをケアしている。

その他に本部事務局が管理しているプログラムがある。2002年の爆弾テロの被災児童20人、寡婦5人を経済的・精神的に支援している。さらにCommunity Development based on Children(CDC)プログラムによって地域支援も実践している。CDCプログラムのうちでも、とりわけスラヤ村とソカ村については、筆者自身も現地を視察したので、次に紹介したい。

スラヤ村はバリ島東部の乾燥した傾斜地に位置する。土地は乳児の頭大の岩石が多く含まれ、栄養分の少ない赤色土である。河川や井戸がないため農作物は特定種のトウモロコシしか栽培できない。主食はこのトウモロコシである。竹とその網代で作った簡素で小さな家屋に居住している。飲料水は雨季に屋根から流れる雨水を樋からパイプを通じてタンクに貯水して確保する。浴場と便所の建物はみられない。収入源は海岸部の漁船のおしだし手伝いである。子沢山で、中には10人の子どもを抱える家族もある。学校経費を払えず不就学の子どもも多い。現在、オーストラリの篤志家の援助を受けて、大きなコンクリート製の貯水タンクの設置を進めている¹⁹⁾。村内の管理組合と共同して計画的・年次的に設置数を増やしている。さらに彼は経費的に就学困難な子どもに就学費の援助を行っている。

18) ハラパンの学校要覧を翻訳して、次の箇所に翻訳掲載してあるので参照されたい。林陸雄「インドネシア・バリ島における子どもの栄養状態と発育問題(5)」、『桃山学院大学キリスト教論集 第45号』、57～67頁。

19) 政府からもタンク設置助成金が出ているが、総予算枠が小さく設置は遅々として進まず、全戸設置の見通しがたない状態である。

ソカ村はタバナン州の西南部、デンパサールとプリンビンサリ村の中間に位置する。周辺の土地はタバナンの旧王家が占有しており、住民はその小作または農業労働者として雇用されている。小作料は安く、収入は不安定である。したがって、不就学の子供が多い。ウィディア・アシ本部はこの村で子どもへの就学支援と後述の植林プログラムを推進している。なお、この村では深刻な水問題に直面している。この村では、これまで、農業用水を用水路から汲み取るか、ホースで家庭の貯水タンクに貯水し、飲用水・料理用水として使用していた。化学肥料や農薬を使用する以前は、そのような水であっても伝統的な手法として問題にはされてこなかった。しかし、現在では農薬や化学肥料の使用量が急激に増加している。取り込んだ水は貯水タンクに貯められ、タンク内に設置してある特殊なつぼ型の岩石で濾過して使用している。水浴びや洗濯等には農業用水路の堰で源水のまま使っている。これもまた有害物質が皮膚を通じて浸潤する危険を内包している。緊急に井戸の掘削を実現する必要があると、ウィディア・アシ本部では考えている。

4. ウィディア・アシ運営の財源問題

ウィディア・アシの運営は、創立期以来、キンデルノトヒルフェからの全面的な支援に依拠してきた。バリ教会が拠出したのは土地と建物である。第5ウィディ・アシの建物については、本学のワークキャンプに依拠した。キンデルノトヒルフェでは5年単位で支援内容を見直し契約を更新してきた。しかし、キンデルノトヒルフェから2002年5月2日文書で、2004年以降の支援停止が通告された。以後は、各ウィディア・アシで自立して運営することとなった。そしてその具体的な対策案についての検討に入った。だが、かかる事態にウィディア・アシ本部職員も各ウィディア・アシ館長・職員も戸惑うばかりであった。いくつかの具体策を講じたものの、採算ベースには至らず挫折せざるを得なかった。バリ教会幹部による多様な交渉の結果、キンデルノトヒルフェからの支援がもう1期（2004年～2008年）延長されることと

なった。しかし、原則は各ウィディア・アシの自立・自主運営であるから、その実現に向けて準備をしなければならない。

そして、キンデルノトヒルフェから、2009年2月24日文書にて、2009年6月30日をもって支援を停止するとの最後通告がきた。しかも、現任の本部事務長であるイ・ニョマン・スイトラが急逝したばかりで、後任も決まっていない状態だっただけに、衝撃はあまりにも大きかった。キンデルノトヒルフェからの通告の撤回はありえない。急遽、後任にイ・ヌガ・スウィクラマを任命した。彼は第4ウィディア・アシ館長として、キンデルノトヒルフェからの支援を得ずに、独自にスポンサーを確保して第4ウィディア・アシを運営していた。彼の人柄を信頼するスポンサー達は、窮状を知って支援の手を次々と差し延べてくれている。

アメリカからは第4ウィディア・アシの子ども全員ばかりでなく、全470人への支援を検討している。カナダでは、建築関係の技術者による補修ワーク団を年に数回派遣する企画を立てた。シンガポールから子ども同士の交流と親によるミニ・ワークキャンプが実施されるようになった。しかし、リーマンショック以降の世界経済不況の様子を見る限り、今後の経済動向に予断は許されない。バリ教会がいつまでも海外からの支援に依拠せず、独力でウィディア・アシを運営しうる財源を確保すべきである。それを如何にして達成するのかが問われている。

なお、2009年の総経費は、詳細については明らかでないが、概略は次のようになる。

7ヶ所の施設運営、CDCプログラムの経費、施設本部運営費を合わせると月額197,195,358ルピア（レート1：100で、約1,971,953円）が必要である。そのうち、本部が各スポンサーから支援を受けて7つの施設に拠出している援助額が78,500,000（約785,000円）であり、7つの施設が独自事業等で自足させているのが73,744,958ルピア（約737,450円）である。2009年の7施設の総経費152,244,958ルピアに対し、7施設の自立度は、48.4%程度といえよう。2002年のキンデルノトヒルフェからの文書を受けて決定された自給自足方針

は未だ存続している。問題はウィディア・アシ本部が新たなスポンサーからの支援を確保するには、何をどうすべきなのかである。世界的な経済不況のなか、海外からも経済支援は低迷している。そうなれば、ウィディア・アシが独自に事業を興し収益を上げていくことが求められる。インドネシアでは2002年に法改正がすすみ、児童養護施設において、その運営経費を確保するために事業を興すことが認められるようになったと聞いている。すでに、各ウィディア・アシでは子ども達の職業訓練を兼ねて小物の製作、パティック製作と縫製、観葉植物の栽培、有機野菜の栽培、家畜の飼育等々の小事業に取り組んでいる。

5. 植林プロジェクトへの取り組み

インドネシアでは地球環境保全対策の一環として森林の乱伐を規制するべく、2007年6号政令を発令し、森林関連法規の改正を進めている。天然林の伐採を制限する一方、植林を奨励し、その人工林から木材を調達する方針である。この政策は環境保全に貢献することにもなる。

そこに着目したウィディア・アシ本部は、ウィディア・アシ本部が所有する未開墾の荒れ地にアルビチア (albizzia)²⁰⁾ を植林するプログラムを作った²¹⁾。バリ島は棚田で有名である、至る所に棚田があるような印象を見る者に与える。稲作の集約農業技術が極めて高いと言えよう。しかし、地形や水利の面から稲作に不向きで棚田を作れないところもある。タバナン県は地下水に恵まれ上等米の産地として知られている。ソカ村にも一面に棚田が広が

20) 樹種名：センゴン ラウト，その他の名称：アルビチア・ファルカータ，バタイ，モルッカソウ，商品名で南洋桐とよばれることもある。

科目：マメ科 *Albizzia* 属の広葉樹。学名：*A.falcataria*。府中家具工業協同組合作成「木材図鑑」<http://www.fuchu.or.jp/~kagu/mokuzai/index.html> (2011年1月6日確認) より。

21) 資料4を参照されたい。

っている。バリ教会が所有している 8 haのうち2.5haは棚田で稲作をしている。散在する残りの土地のほとんどが傾斜地であり、棚田を作れないか、作っても意味をなさない。その傾斜地を利用して生育の早いアルベチアを植林するのである。カナダの林業会社と提携して、カナダ種のアルベチアの種子を購入し、発芽させ、10cmほどの苗にしてから、1.5m間隔で植えていく。3ヶ月後には約2mにまで生育する。5年後には伐採できる。伐採後の根を残しておくとし引き続き生育し、5年後には再び成木となる。しかも、その繰り返しができるという。この材質はパルプや、木彫や家具の原材料として使われる。

概算によれば、種子と肥料の購入費、管理人の給与、植え付けのための賃金等の経費は、1ha当たり118,840,000ルピア（現在のレート1:100で、約1,188,400円）である。それが5年後には1,206,160,000ルピア（約12,061,600円）となる見込みである。この収益をウィディア・アシの運営費に当てることが可能である。あるいはまた、蓄積して独自財源とし、海外からの支援から独立してウィディア・アシの運営に臨むという選択肢もある。植え付けには、村内の小作農や農業労働者を雇用して行う。そのことによって、この植林プログラムは地域の開発の一翼を担うことにもなっている。ウィディア・アシ本部では、丘陵の頂上に集会所と手洗い所を設置し、国内外の若者を招き、植林を通じて環境問題について体験的に学び議論する場にしたいとの構想も持っている。できれば、海外から参加する青少年には、各自の小遣いから一人当たり10本の苗の提供を提案したいと構想している。

6. 国際ワークキャンプ・インドネシアの概要

国際ワークキャンプは1987年に始まるが、内容からみて、次の3期に分けることができる。

第1期：1987年から通算14回実施。ジュンブラナ県ムラヤ郡ムラヤ村に位置するバリ教会立第3中学校に隣接して第5ウィディア・アシを建設した。



このような傾斜地に植林を



植林プログラム開始の祝福式



慎重に植え付けを



アルベチアの苗



数ヶ月に後の生育ぶり



村の男性や女性に仕事を

建設したのは、職員棟1、宿舎4、食堂1、台所1、庭園の整備、女子寮1の建て替え、食堂の拡張である。そこでは120～150名の中学生・高校生が居住する。

第2期：2000年2005年で6回実施。プリンピンサリ村にある第2ウィディア・アシの改築である。老朽化したマンディ棟（トイレと浴室）2棟の建て替え、貯水槽の改修、浄水装置の設置、男子寮の改築、食堂兼集会室の改築である。2002年10月の爆弾テロ事件のため2003年第18回目のワークキャンプは実施を見送ったが、学内外有志からの基金により女子寮を改築した。第18回目のワークキャンプは2004年度に実施した。

第3期：2006年からの5年間。プリンピンサリ村の第2ウィディア・アシで、老朽家屋を撤去し、職員寮、男子寮、女子寮各1棟を新設した。2010年の第24回には庭園に遊歩道を設置した。2011年には、ムラヤ村にある第5アスラマで職員寮を建て替える予定である。

この24回にわたるワークキャンプには、本学から500名を超える学生が参加している。同じ日本聖公会系の立教大学、神戸松陰大学、神戸国際大学の学生も参加している。特に神戸松陰大学からは第17回まで延べ30名以上が参加している。第14回までは、ジャカルタやバリの学生が延べ40名以上、第15回以降は例年バリの学生10名が参加している。

キャンプ期間中には、様々なプログラムを日本とインドネシアの学生が協力しながら展開していく。そのための準備や打ち合わせ、進行過程で濃密な国際交流・文化交流が展開した。さらに、施設で居住する子ども達との文化交流、隣村のカトリックの施設・近隣の小中学校・養護学校・他の同系列の施設訪問を通じて、日本とインドネシアの青少年による文化交流が繰り返されてきた。

7. 参加学生による自主的な支援プログラム

参加した学生達が自主的な支援プログラムを作り実施してきた。その第一がバリ奨学金の会（Bali Scholarship Association BSA）である。第1回参加者からの提案で始まった、施設の子も達のための大学進学のための奨学金である。毎年新規に奨学生2人を採用し、国立大学の授業料相当額を給付するのである。例えば、先に述べたイ・ニョマン・スウィトラはその第1期生である。彼はペトラキリスト教大学で英文学を学び、バリ教会が運営する観光産業専門学校ディアナ・プラの英語教師として赴任した。3年後にウィディア・アシ本部の事務長として抜擢されている。ウィディア・アシで育ち学んだ子どもが、次代の子も達を支援する仕事に従事しているのである。このようなバリ奨学金の活動が20年以上続いてきたのである。

第2はオールジャランと称する参加者による同窓会活動がある。気軽に楽しみながらできる身近なボランティア活動の推進を目的としている。大阪府下にある金剛コロニーの秋季祭や学内の学園祭に焼き鳥店を開き、その収益をコロニーやバリのウィディア・アシに寄贈する活動である。2001年からは第15回参加学生井口奈美の発案で、インドネシア名物のナシゴレン（焼き飯、インドネシアの香辛料を使い味付けが辛い）とピサンゴレン（バナナの天ぷら）を学園祭で販売し、その収益金を施設の子も達の衛生費として寄贈するようになった。施設の運営費は食費と教育費をまかなうのに精一杯であり、衛生費にまでは届かない。子ども達の歯ブラシや歯磨き粉、入浴・手洗い石けん、ヘヤー・シャンプーの購入費に充てられる。この取り組みは、次年度の参加学生に引き継がれ継続して取り組まれている。

第3はダサプルティ奨学金である。これは第14回に参加した藤並祐馬が開設したものである。彼は、卒業後、バリ教会立の観光産業高等専門学校ディアナ・プラ（PPLP Dhyana Pura）の日本語教員として2年間勤務した。その当時の低額な給与の中から子どもを大学へ進学させることの困難度を痛感

して、設立した奨学金制度である。前述のバリ奨学金は国立大学進学者を対象としている。しかし奨学資金を必要としている者に、中学校の就学補助、高等学校卒業後の語学学校や私立大学進学希望者がいる。その彼らを対象に考案されたものである。「アスラマから広義の高等教育まで (Dari Asrama sampai Perguruan Tinggi)」進んでほしいとの願いを込めてDASAPERTIダサプルティと命名した。支援金提供者は彼以外に、友人数名と本学教員およびその友人が参与する小さな会である。現在の支援状況は、高等教育機関4名、高校3年2名、高校1年3名、中学3年1名の計10名である。これまでに高等教育機関卒業生4名を出している。

このように国際ワークキャンプ・インドネシアに参加することによって、参加学生は、自らの問題意識に応じて多様な支援プログラムを企画し実現してきた。このような活動を通じて、自ら考え企画し実施し点検し再構成していく。その過程および結果をレポートまたは論文としてまとめた場合もある。第14回参加の藤並は、当時のバリにおいてゴミの無分別によるポイ捨ての多い現状に着目し、ゴミの処理について調査研究し論文「バリ人の環境意識と環境教育」として纏めた。それは学内の学生懸賞論文の優秀作に選ばれ、学生論集第16号(2001年)として刊行されている。2010年の3月下旬に6名の学生が、ソカ村での植林活動に自発的に参加している。その様子をニュースレターとしてまとめている。彼らは第23回国際ワークキャンプに参加した者であるが、同じく参加した仲間と協働して、2010年の学園祭において模擬店とフリーマーケット店を開いた。そのおり、収益をウィディア・アシの子ども達の教育支援金として贈呈する趣意書とウィディア・アシの現状紹介、上記ニュースレターを配布して、一般学生への啓発活動にもつとめている。その成果として、2011年の3月上旬に2週間のミニ・ワークキャンプを企画し10名の学生が参加する。ソカ村における2日間の植林活動と第2ウィディア・アシでの営繕活動を実施する予定である。次に、前回実施された植林活動についてのニュースレターからその一部を紹介する。

8. ソカの植林プログラム参加体験

「ソカ植林プログラム」と銘打ったミニ・ワークキャンプは2010年3月21日～4月2日に実施された。そのうちの3月22日～24日の3日間で植林を行っている。参加したのは、第23回国際ワークキャンプに参加した学生で、1年生から3年生まで6人である。内訳は女子5人、男子1人である。参加学生はウィディア・アシの概要を次のようにとらえて紹介している。

バリ・プロテスタント・キリスト教会はいくつかの社会事業を行っています。その中心となるのが教育と生活支援です。

教育・福祉省を設置し、教育部門として保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、職業高校、高等教育機関を開設しています。福祉部門として7箇所の養護施設と2箇所の地域開発プログラムを開設運営しています。

ウィディア・アシ財団というのは、その福祉部門の名称で「愛と知」を意味しています。政府の認可を受けた正規の福祉施設です。正式には、パンティ・アスハン・ウィディア・アシ（ウィディア・アシ養護施設）と言います。普段は学寮を意味するアスラマという言葉で呼び習わしています。第1アスラマとか、第2アスラマとか。

第1アスラマはデンパサールのセセタン通りにあり、ハラパン（希望の意）という名の幼稚園～高校までが同敷地内にあります。主に高校生と大学生が生活しています。

第2アスラマはプリンピンサリ村にあります。この村は、その昔、ジャングルだった所に入植して開拓したプロテスタントのクリスチャン村です。近くにはカトリックの開拓村もあります。キャンプ期間中はこの村でホームステイします。ワークだけでなく、ホームステイの家族やアスラマの子どもたちとの交わりがとても素晴らしく、心が満たされ安らぎます。

子どもたちの笑顔と輝く瞳にはびっくりします。日本の子どもとはかなり違います。貧しさゆえに家族と離れてすごさなければならないのですが、このはじけるような笑顔がそれらの寂しさを吹き飛ばしているようです。アスラマは子どもたちにとって、とても大事な場所となっています。それだけに、これからも子どもたちを守る砦として存続できるよう、様々な支援策を考えていく必要があります。

できるだけ多くの方々に、ウィディア・アシの存在を知り、その運営意義を理解してもらいたいと思います。

ワークキャンプを通じて、ウィディア・アシで生活する子ども達の社会背景や現状を知った学生達は、ウィディア・アシの必要性を痛感するとともにその維持・運営に何らかの関わりを持ちたいと考えたとともに、広く学内外へ子ども達の現状を訴えていきたいと考えている。その具体的な活動として、植林プログラムに参加したのである。その動機を次のように記している。

<バリ島の子どもたちを救おう>

環境問題改善対策の一環として、バリ島のソカ村で植林プログラムが2009年9月からスタートしました。その様子を林教授の研究報告会で知りました。インドネシア語でセゴンSengon、英名でアルビチアAlbiziaという木（日本名、南洋桐）ですが、それは5年で数十メートルに成長するそうです。しかも根を残しておくで、引き続き成育し、3回も収穫できるそうです。用途は木彫の材料やパルプです。木質が柔らかいという特徴を活かすそうです。

<今回はなぜ植林なのか？>

子どもたちを支援している経費は、これまで海外からの支援に頼ってきました。その支援がいつまで続くのか、予断を許さない経済不況が続いています。近い将来、海外からの支援を脱却して自立する必要があります。そのための一つの試みとして、2009年の9月からソカ村での植林

プログラムを開始されたのです。そのプログラムに私達6人も林教授の案内で参加しました。

第23回IWCの参加費用の一部返還されましたので、そのうちの一部を苗木購入費に当てました。

彼らは植林活動の様子を次のように記している。

今回のボランティア活動はソカ村で3日間植林活動をしてきました。それは貧しい子どもたちのために、植えた木を伐採して販売し、その収益を子どもたちの教育費や生活費に当てようというものです。

このプログラムの背景には環境問題があります。インドネシア政府は、環境保全のため、欧米諸国からの資金援助を受けてカリマンタン島での森林伐採を禁止し、森林保護にのりだしました。そのため木材は高騰し始めました。天然林を伐採せずに、新しく植えた木を伐って使おうというのです。私たちもこのプログラムに参加し、合計約720本の苗木を植えてきました。その苗木はとても小さく、茎が細いので気をつけて植える必要がありました。また、私たちは30℃を超える気温と強い日照りで30分も続けて作業をすることができませんでした。

社会福祉学科3回生の赤松蘭は次のように語っている。

ソカ村の植林現地を見て回った。4mを超える木が一面に広がっている。これらは昨年9月に植えたものだと説明を受けた。その成長の早さに驚いた。私が植える苗木もそうなるのかと想像したら、いますぐにも取りかかりたいとの衝動に駆られた。

植林の方法について、イブ（年配の女性への呼び習わし）たちが実地にやってみせながら具体的に教えてくれた。ここで常勤として働くのは、管理者の二人だけだ。苗木を植えるための穴掘りは男性が、植えるのは女性である。その人たちはこの村の西集落と東集落からの日雇いである。穴は既に掘られているので、植林は女性だけです。苗木を繊細に扱える女性が植林作業では好まれるからだ。その女性たちがたくさんの肥料と苗木をかついで運ぶ、その体力に驚かされた。足下の悪い斜面での移

動や作業はけっこうきついからだ。

私たちの作業は苗木を穴に入れて土をかぶせ水をやること。作業内容は単純だった。それだけに疲れも早くくる。照りつける日差しが疲れを早める。汗が止まらず、仲間との会話も減ってくる。そんな様子を見て、イブがいろいろ話しかけてくれた。暖かい笑顔、日常や身の回りの話題。いろいろ興味がかき立てられ、知識もふえた。疲れ具合も緩やかになった。

わずかな日数、まねごと程度の植林であったが、720本を植えた。これらが立派に成長し、環境保全や子どもたちの生活基金へと発展すると思うと、作業の疲れもある種快感へと変じていった。

さらにもう一人国際教養学部2回生の吉岡春海は次のように語っている。

緩やかな斜面にセゴンの苗木を植えるのですが、太陽が照りつけ、風がないため、倒れそうになるぐらい暑く感じました。こまめに、休憩を多くとりながら作業しました。

苗は種からつくります。その方法を見せてもらいました。1cmぐらいの小さな種を一粒、一粒丁寧に発芽させていくのです。熱湯をボールに注ぎ、温度計で一定温度になるまで待ち、そこに種を入れて数分待ちます。その後、種を取り出してやわらかいスポンジのような特殊なマットに入れて数日保管すると、芽が出てきます。その芽をビニールの小さなポットに移し変え、ある程度成長するまで待ちます。5～10cmの大きさまで成長したら、いよいよ植林です。

ビニールのポットから取り出すには、バケツに水を張っておき、その中に浸けてやさしく解し、根株の土とポットの間にはゆるみが出たときにポットをつまんでゆっくりと引っ張ります。すると土と一緒に根株が出てきます。意外とこの作業が大変です。なかなかすんなりとはポットから出てこないのです。そのコツを掴むまで、教えてくれるイブに何度も迷惑をかけたことを思い出します。

取り出した苗木を1m50cm間隔にあけられた穴に植えていきます。この作業もまた、大変で、高価な苗木を落としたり折ったりしないように気をつけながら植えました。そして植えた苗木にイブが土をかぶせ水をたくさんあげれば完了です。

イブたちにはたくさん迷惑をかけました。最終日の朝、イブから「昨日、私はあなたたちと一緒に働いている夢を見ました」と笑顔で言っていました。林先生の解説では、「インドネシアのお金持ちやエリートの大學生は日焼けしたくないので、日中は外に出ないそうです。また、現地で働くイブたちの日給はたったの400円だそうです。そんななか、イブたちにとっては、経済大国日本からエリートの學生がやってきて、この低賃金のつらい労働と一緒にすることになるとは、まさに夢の中の話、普段の生活ではあり得ない体験だったのでしょう。君たちだけでなくイブたちにとっても、貴重な喜びの出会いになったから、そのような夢をみたのでは」とのことでした。とても納得できました。

さいごに

これまで、筆者はバリ教会の社会事業に着目し、そこに生活する子ども達が直面している問題について調査研究してきた。それらの研究報告の中で、バリ教会やウィディア・アシ本部、各ウィディア・アシについて触れることがたびたびあった。しかし、それらの組織や活動について体系的に紹介する機会を失ってきた。今回、このようなささやかな紹介をすることとなった。かなりおおざっぱなアウトラインを描いたに過ぎない。今後はできるだけ早い時期に、この研究ノートを骨格として、詳細な紹介に組み立て直す予定である。

さらに、国際ワークキャンプに参加した学生達が、ワークキャンプを通じてどのように学び成長していったのか。その後の活動の様子を掘り起こし紹介したいとも考えている。

なお、この研究ノートは本学の研究プロジェクト「インドネシアとの文化的交流を深めるための総合的研究(2)」の成果として報告するものである。

資料1 バリ・キリスト教・プロテスタント教会成立過程

年	事 項
1580	バリ島にフランシス・ドレイク脚立ち寄る ポルトガルの貿易本拠地の設立を試みる
1597	最初のオランダ船来島
1600	オランダの探検隊が再度来島 バリ島は航海路上の戦略的位置 仏、英、蘭3カ国によるバリ支配に干渉 蘭が軍事力で勝利
1848	バリ人は抵抗し開戦
1849	バリ人は抵抗し開戦
1867	オランダ改革派教会の宣教師が宣教活動を開始
1875	宣教師ヴァン・エックが発病し離島
1881	宣教師デ・ヴローム殺害される 14年間に亘る宣教活動で改宗者は一人のみ
1904	中国船の難破 略奪に対す賠償請求 蘭はバドオンの領主に責任を転嫁 領主は支払いを拒否
1906	蘭は服従を迫る ププタン（敵軍に向かっていく儀式に乗っ取った集団自決）で抵抗
1908	クルンクンのププタン
1929	キリスト教宣教同盟の中国人代表ツァン牧師が来島 バリ人女性と結婚している中国人クリスチャンの面倒を見る 布教は許可されていない 密かに布教
1931	キリスト教同盟の巡回牧師ジャフレイ博士来島 ツァンと二人で洗礼式を挙行 4人の洗礼志願者 ウンタル・ウンタル村で2人が洗礼を受ける 12人が洗礼を受ける
1932	市場の広場で洗礼式 75人が洗礼を受ける
1933	改宗者266人に オランダ領事はツァン牧師の離島を命ずる 指導者がいない状況下で、信徒は様々な迫害を受ける ジャワ島のオランダ改革派教会はヘンドリック・クレマー博士をバリ島に送り調査
1934	東ジャワのオランダ改革派教会は2人のジャワ人牧師をバリ島に1942年まで派遣

バリ・プロテスタント・キリスト教会の社会事業と学生による支援活動

年	事 項
1935	3つの教徒グループ
1937	オランダ教会は宣教師1人と聖書翻訳者を追加派遣 牧師達は3グループを統合
1938	バリ・キリスト教徒連合を結成
1939	プリンピンサリにキリスト教共同体誕生
1942	日本軍がバリ島を占領 信徒数200人 マデ・ルング最初のバリ人牧師に就任
1945	8月17日独立宣言
1946	日本軍撤退始める 蘭が再度の植民地支配を
1946	グスティ・ングラ・ライ大佐によるゲリラ戦
1947	蘭は統制を強化 プリンピンサリで第1回プロテスタント・キリスト教教会会議開催
1948	蘭は統制を強化 プリンピンサリにおいて教会名をバリ・キリスト教・プロテスタンヨ連 合に改称
1949	蘭は独立を承認 バリ人・キリスト教・プロテスタント連合に再度改称 オランダ人によるバリ教会支配が終わる
1950	バリは共和国に参入 信徒数500人
1951	バリ・キリスト教・プロテスタント教会に改称
1953	マストラは教師に就任
1955	ウィディア・ブラ設立
1960	信徒数2000人
1961	教会員数3000人 マストラは牧師に就任
1963	アグン山の噴火 マストラは救済に奔走 5つの教会を開き、350人に洗礼を授ける
1965	9・30事件（肅軍クーデターとその鎮圧）* クーデターの背後に共産党がいたとしてこれを徹底的圧殺* スハルトは陸軍内の指導者として頭角を表す キリスト教徒は同類と見なされ迫害される
1965	マストラはアメリカへ亡命 信徒数6500人
1966	スハルトは実質的権力を掌握
1968	スハルトは大統領に就任
1970	教会会員数7000人
1972	マストラがアメリカから帰国 アビアンバセ教会会議 新方針を採択 教会活動の一大転換を図る
1974	マストラはKNHに紹介された

年	事 項
1975	第1 アスラマ開設
1976	第2 アスラマ開設
1980	第3 アスラマ開設
1981	第4 アスラマ開設
1987	第5 アスラマ開設 IWC発足
1999	第6 アスラマ開設
1999	第7 アスラマ開設

出典：ダグラス・マッケンジー著，桃山学院大学インドネシア・ワークキャンプ
実行委員会訳『マンゴー樹の教会』，聖公会出版，1989年。

*石井米雄監修，土屋健治，加藤剛，深見純生編『インドネシアの事典』同朋舎，
1991年

資料2 バリ・プロテスタント・キリスト教会の構想と使命, 機構図



Visi GKPB 1984 - 2008
"MENJADI BERKAT DAN TERANG BANGSA-BANGSA"

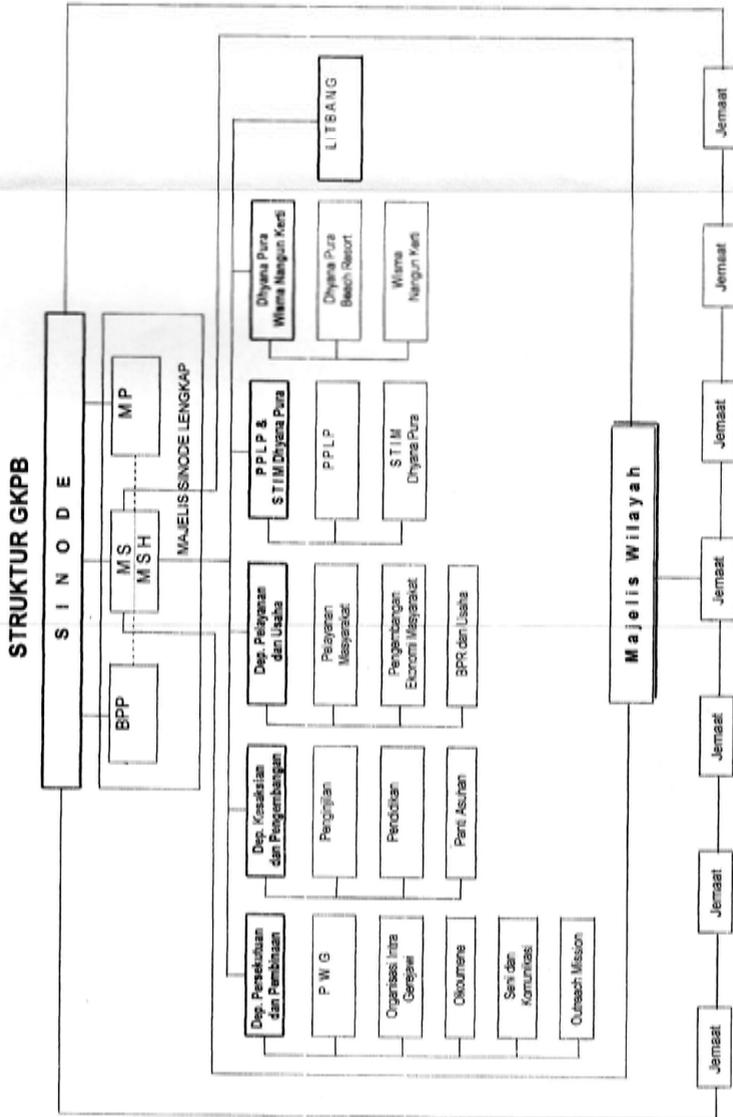
Misi GKPB 1984 - 2008
"MANDIRI DALAM TEOLOGIA, DAYA DAN DANA"

Tema GKPB 2004 - 2008
"MENJADI GEREJA YANG HIDUP"

Tujuan Program :

Berdasarkan pada Visi, Misi, Tema dan Mandat Sinode ke 39 GKPB, maka tujuan Program GKPB untuk masa bakti 2004 - 2008 dapat dirumuskan sebagai berikut:

1. Mengantar warga GKPB bertumbuh dewasa dalam kehidupan berteologia, bergereja, bermasyarakat dan berbangsa.
2. Mengantar warga GKPB untuk mewujudkan nilai-nilai Kerajaan Allah berupa : cinta kasih, persaudaraan, kesatuan, kerukunan, kerendahan hati, kejujuran, kebijaksanaan, kesetiaan, dapat dipercaya, saling mempercayai, pengorbanan dan mencintai lingkungan demi kesejahteraan sesama manusia.



資料3 ウィディア・アシ本部発行の紹介パンフレット

A JUST PROSPEROUS SOCIETY

MOTTO: "BLESSED TO BLESS"

YAYASAN WIDHYA ASIH

**JALAN RAYA KAPAL No.20
MENGWI-BADUNG, BALI, INDONESIA**

PHONE: + 62 361 8877129

MOBILE: + 62 8123998361

**E-MAIL: widhya@indosat.net.id
info@widhya-asih.or.id**

WEBSITE: www.widhya-asih.or.id

**« Come to me, all of you who are
tired of carrying heavy loads,
I will give you rest ».**

Matthew 11:28

FOREWORD

The Widhya Asih Foundation is a non-profit and Christian Protestant organization located in Denpasar, the capital of Bali Island in Indonesia. The "Yayasan Widhya Asih", which means "House of Knowledge and Love" was created in 1975. Currently, we have 7 orphanages scattered around the island and development projects for local communities.

Naturally, our philosophy is to provide shelter and food to children and to give them an education and love, necessary for a better future. Today, we welcome more than 460 children, from 2 to 24 years old, within our structures.

Our five year strategic plan - from 2009 to 2013 - explains clearly our vision: a just prosperous society. Indeed, we aim to build a better society, by caring for and empowering needy people. The purpose is to provide sustainable development for communities by improving their living conditions and ensuring the preservation of the local environment and ecosystem through our initiatives. We are committed to break the entrenched cycle of poverty through education. We want to encourage employment and turn people into contributing members of their community once they reach adulthood.

Widhya Asih Foundation, all the children and staff would like to thank you very much in advance for the interest you show in our strong wish to improve children and poorest people's daily lives and futures.

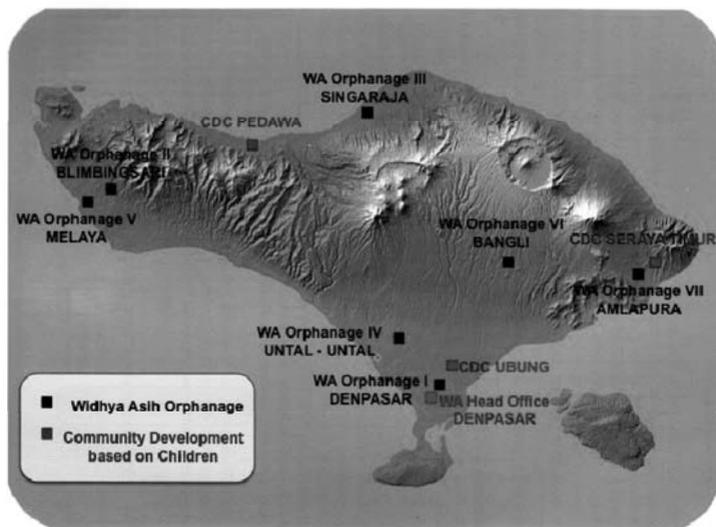
Throughout this booklet you will discover all our activities and projects. Please do not hesitate to visit us, to play with children, or to bring material and financial support because we really need your help to successfully complete our mission.

You also can participate to create a fair and better world!

Director of Widhya Asih Foundation



I Nengah Swikrama



ORPHANAGES AND CDC ADDRESSES

ORPHANAGE WIDHYA ASIH I
Jln. Raya Sesetan GG Camar No. 1A
Phone : +62 361 224538 ext 118
Denpasar, Bali

ORPHANAGE WIDHYA ASIH II
Blimbingsari village - Melaya
Phone : +62 365 4700323
Jembrana, Bali

ORPHANAGE WIDHYA ASIH III
Jln. Supratman Gang Undis
PO. BOX 166 Singaraja
Phone : +62 362 23905
Singaraja, Bali

ORPHANAGE WIDHYA ASIH IV
Jln. Raya Dalung No. 9 Untal-Untal
Phone : +62 361 422605
Kuta Utara, Bali

ORPHANAGE WIDHYA ASIH V
Jln. Raya Melaya-Gillimanuk
Jembrana, Bali

ORPHANAGE WIDHYA ASIH VI
Jln. Brgjend Ngurah Rai No. 83
Phone : +62 366 91160
Bangli, Bali

ORPHANAGE WIDHYA ASIH VII
Jln. Jendral Sudirman 25 x
Phone : +62 363 217996
Ampfapura, Bali

CDC UBUNG
Jl. Cokroaminoto Gg Puduk No. 18
Denpasar, Bali

CDC PEDAWA
Desa Pedawa Seririt
Singaraja, Bali

CDC SERAYA TIMUR
Desa Seraya Timur
Karangasem, Bali

資料4 CDCとは何か？

CDCの概要については、ウィディア・アシ本部が発行しているパンフレットに紹介文があるので、次にその翻訳を示す。

ウィディア・アシ基金はまた子どものための地域開発プロジェクトを発展させてきた。これらのプロジェクトの目的は僻地の山腹の乾燥地帯にある村を支援することである。村人達は、われわれには想像することもできないような絶望的な生活状態の中で暮らしている。月収は20万ルピア（約2000円）にすぎず、家族は日々の生活の中で様々な困難に直面している。彼らはわらと竹で作った10平米の家に住み、米を購入する余裕がなく、トウモロコシのみを主食としている。村人の多くは読み書きができず、子ども達を学校へ通わせるための費用を払うことができないでいる。この地帯はとても乾燥しており利用できる水がなかった。渴きをいやすために彼らはココナッツを用いている。いくつかの村ではタンクを設置している。それは、6ヶ月の乾季の間、2ヶ月間分の水を蓄えている。その貯水がなくなると、女性は村から徒歩で3時間かけて山の水源地に水を汲みにいかねばならない。その水は飲料用と調理用に使われる。水浴びと洗濯、その他のために使う余裕はない。週に一度、シャワー代わりにグラスの水にハンカチを浸して、それで体をぬぐっている。基金の目的は、30年前に見捨てられてきた田園を再開発し、定住し自活しうる経済力を提供することである。ウィディア・アシ養護施設の収容力に制限があるので、子ども達は引き続き家族と一緒に暮らしている。

貧しい人々を支援するために様々なプログラムを開発している。

1. 施設設備と基盤整備：多目的ホール、簡易便所、貯水タンクの建設と道の補修
2. 農業開発：新しい農業技術、肥料の使用法、灌漑システム、農地の開拓、再植林による環境保護
3. 経済開発：牛、豚、山羊の飼育と手工業によって所得の増加と維持に役立てる

4. 一般診療サービス：定期的検診サービス，乳児検診，児童の定期検診
5. 子どもへの基礎教育：学校経費，教材費（制服，教科書，文具等）と交通費の融資，栄養プログラム

このCDCプログラムは2004年にウブンで，2007年にセガで，2008年にスラヤ，ブダワで実施している²²⁾。

22) “Widhya Asih Foundation”, www.widhya-asih.or.id (2011年1月6日確認)より

資料5 ウィディア・アシ本部作成 「ソカの植林プログラム企画書」

Widhya Asih Foundation

PROPOSAL FUNDING FOR FORESTRY PLANTATION PROJECT PERIOD 5 YEARS

1. GENERAL PROJECT INFORMATION

1.1 Project Name

Agro-Forestry Plantation Project

1.2 Project Location

Widhya Asih Foundation, Bali-Indonesia

1.3 Project Timing

60 months (5 Years)

2. PROJECT RATIONALE

2.1 Brief Background to the Situation

Widhya Asih Foundation covers expenses for food and education of their children in 7 Orphanages. Widhya Asih does not have business acquire for income to cover all operational expenses. Our financial fund is grant from other organization, institution or personnel. These funds are used to pay all children living expenses and school fees in our seven orphanages.

The Foundation would like to create self-sustain by making small business which could provide income for foundation with consideration, within next five years we enable to reduce interrelatedness to other organization, institution or donors.

2.2 Statement of Needs / Issues

Food and Nutrition and Education

The cost to provide a balanced nutritional diet and school fees for 475 children in all orphanages and 200 children in Community Development Project around US\$ 230,000 (with exchange rate of IDR 9,200/ 1 USD) per annum which is currently not being met and hence the foundation is at risk of not being able to continue.

2.3 How the Project will address Needs / Issues

Land

To cultivate unimproved land in Soka, Tabanan

People around the Area:

The Foundation hires local villagers to work in this plantation project besides giving them opportunity in work field because most of them usually do not have permanent job, the Foundation wants to build good relationship to this conservative local villagers.

Widhya Asih Foundation

PROPOSAL FUNDING FOR FORESTRY PLANTATION PROJECT PERIOD 5 YEARS

Foundation:

To create self-sustaining

Global Warming Issue:

This agro-forestry will reduce the global warming because of on-going project which will plan about 4,500 trees for 1 ha. Presently, Widhya Asih already planted 2 ha land out of 8 ha with Albasia trees. Later on, this will be Widhya Asih main project.

2.4 Project Description

2.4.1 Major Goals

To cultivate unimproved land in Soka with Albasia trees

2.4.2 Major Objectives

To provide living expenses (food and educational costs/ school fees) for children within next five years.

2.4.3 Staffing

The personnel requirements

Widhya Asih Foundation works under the direction of local consultant

Internal Financial Control:

Widhya Asih Foundation will make progress report including all expenditure involved within this project.

2.4.4 Time Frame

This project covers period of 60 months starting and the report to donor will be made at semester period of current fiscal year

3. PROJECT MANAGEMENT AND ORGANISATION

3.1 Organizational Profile

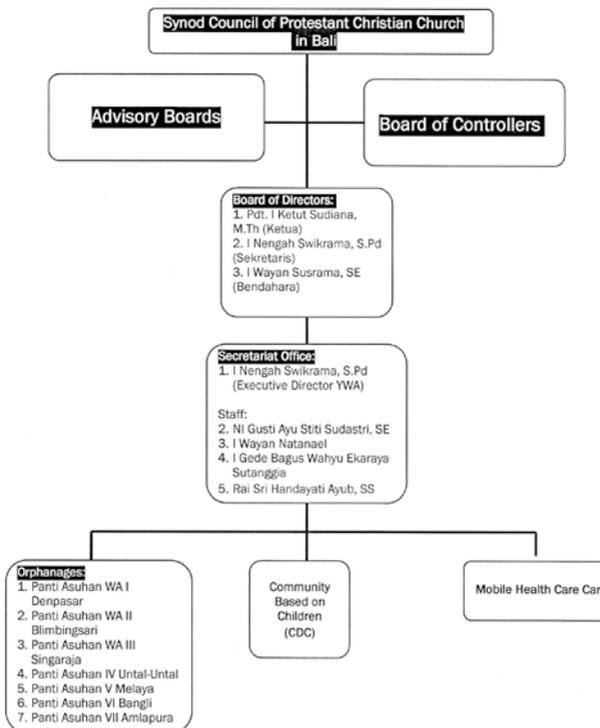
Name of Organization	: Widhya Asih Foundation
Type of Entity	: Yayasan a Registered Legal Institution
Entity Registration No	: AHU – AH.01.08 – 293 dated 4 th May 2009
Address	: Jl. Raya Kapal No. 20 Mengwi, Badung – Bali
Phone No.	: +62361 8877129
Email Address	: widhya@indosat.net.id or info@widhya-asih.or.id
Name of Contact Person	: I Nengah Swikrama, S.Pd
Mobile Phone No	: +6281 239 9836 1

Widhya Asih Foundation

PROPOSAL FUNDING FOR FORESTRY PLANTATION PROJECT PERIOD 5 YEARS

Widhya Asih is a non-profit organization which has been operating since 1975. It is domiciled in Denpasar. The main objective of Foundation is to give supporting fund to Orphanage children of educational fund and other supporting programs, as well as additional facilities in learning and teaching process. Vision of Widhya Asih is *a just prosperous society* and its misión are *caring and empowering the needy, buiding society good charácter* which recently, Widhya Asih Foundation maintains 7 Orphanages in Bali, 3 Community Based on Children Project and 1 Mobile Health Care program.

WIDHYA ASIH ORGANIZATIONAL STRUCTURE



Proposal for Forestry Plantation Project

Widhya Asih Foundation

PROPOSAL FUNDING FOR FORESTRY PLANTATION PROJECT PERIOD 5 YEARS

3.2 Responsibility and Supervision For Project

I Nengah Swikrama, S.Pd
Director of Widhya Asih Foundation
Jl. Raya Kapal No. 20 Mengwi, Badung - Bali – Indonesia
Phone : (+62361) 8877129
Fax : (+62361) 424862
Mobile : +6281 239 9836 1
Email : widhya@indosat.net.id or info@widhya-asih.or.id

3.3 Project Evaluation

Widhya Asih Foundation will make evaluation for every activity occur in this project. The activities can be seen in budget explanatory.

3.5 Project Sustainability

Total expenses for 5 years approximately US\$12,910 (*with exchange rate of Rp. 9,200/1 \$US*), in which every year will cost as presented in attachment 01. Within next five years, the Foundation will be able to continue this project by the income acquired.

4. BUDGET

4.1 Project Costs

The expenses needed in this project can be detailed in attachment 1

4.2 Expected Funding Source(s)

Every organization, institution and personnel

4.3 Total Funds Requested

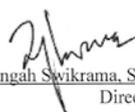
As present in accompanying attachment.

5. OTHER INFORMATION

Account Detail as follows:

Acc. Name : Yayasan Panti Asuhan Widhya Asih GKP
Address : Jl. Raya Sesetan No. 62, Denpasar Bali – Indonesia
Bank Name : BANK MANDIRI (BRANCH DENPASAR)
Address : Jl. Veteran No.1 Denpasar Bali-Indonesia
Account No. : 145 - 000 435 2536
Swift Code : B M R I I D J A

Kapal, March 24th 2010
Submitted by


I Nengah Swikrama, S.Pd
Director

ESTIMATED COST ALBASIA HYBRID PLANTATION PROJECT / Ha

YEAR I

Description	Expense
1 Opening Land	<i>Depends on land condition</i>
2 Land Preparation - for Planting :	12.500.000
- Making Ajir (stake for boundary)	
- Making holes for tree	
- Basis Fertilizer	
- Planting Tree	
- To Fence the land (of planting tree)	
3 Fertilizers & Nutrition	
- Biozon G1, G2, G3	750.000
- Bokasi, 1 ton	750.000
- Phosfat (18%), 1 ton	1.640.000
- Poskha, 250 kg	450.000
- Urea (fertilizer), 1 ton	1.800.000
- Za, 250 kg	450.000
- Pesticide (special liquid to kill pests)	250.000
4 Small Albasia Tree of 4500 , 1 ha, @ Rp 8000	36.000.000
5 Maintenance	13.000.000
- Intensive Fertilizer I & II	
- Clearing (of tree branches)	
- Periodic Fertilizer I	
- Operational Maintenance (of worker)	
	67.590.000

YEAR II

Description	
1 - Pesticide (special liquid to kill pests)	250.000
2 Maintenance:	16.000.000
- Clearing (of tree branches)	
- Periodic Fertilizer II & III	
- Operational Maintenance (of worker)	
3 Clearing (of land)	2.000.000
	18.250.000

YEAR III

Description	
1 Maintenance:	16.000.000
- Periodic Fertilizer IV & V	
- Operational Maintenance (of worker)	
	16.000.000

YEAR IV

Description

1 Maintenance:	17.000.000
- Periodic Fertilizer VI & VII	
- Operational Maintenance (of worker)	
	<u>17.000.000</u>

118.840.000

Estimated Income from Clearing and Final Harvest:

1. Clearing (of 2 year within period I)= Rp 100.000 X 1.000 trees	100.000.000
2. Harvest time (of 2 years forward) = Rp 350.000 X 3.500 trees	1.225.000.000
TOTAL	1.325.000.000

Estimated Income 1.206.160.000

Proposed by:

I Gusti Ayu Stiti Sudastri, SE
Accounting Officer

Approval:


I Nengah Swikrama
Director